

フランスにおける文化会館のありかた

フランス人にとって 劇場は大切な公共サービス

アートエネルギー France2002開催

La Lettre
DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo



笹川日仏財団
ニュースレター
Vol. 6 No. 2

フランスで現在活躍する劇作家ジャン＝ポール・アレール、ジル・フェブリエを招き、それぞれの作品である「急流の男」(岡田正子訳/演出)や「テラス」(沢田次郎演出日本版、本人フランス版)などを舞台化した《アートエネルギー France2002》が



向かって右からフェブリエ氏、アレール氏、通訳の山田女史

5月29日から6月16日までシアターXで開催された。これは、長年の間フランスとの交流を深めてきた日本の演劇人であるIKUO三橋氏、岡田正子女史、谷正雄氏の三氏が企画。中でも、6月7日に開かれた講演会「フランスにおける文化会館のありかた」は、

「製作者たちの一人よがりの舞台になるのを避けるために、地方自治体などから選出されたメンバーの他に市民も加わった協議会で内容を審議し、劇場ディレクターを選任する際には、市長の意見が反映されます。

アレール氏とフェブリエ氏を囲んで、アットホームな雰囲気の中に進められた。アレール氏が所長を務めるパリ郊外のマルヌ川文化活動センターは、収容人員二千人の大ホールと五百席の劇場、また小さな実験劇場のほかに十七室のリハーサル室からなる大規模な文化会館である。

「もともとフランスにおいて、劇場は大切な公共サービスの一つとして考えられています。総予算の8割を主に市からの助成金で賄っているために、150フランから200フラン(約2700円から3600円)という適性価格で入場料を設定できます。観客に多額の入場料を負担させなくて済むのです」

また劇場は地域のすべての人間に開かれたものであるという考えに立っているため、観客に何をさせるか大きな問題になっていくのだという。

またチケットは定期購置制度を設け、エンターテイメント性ある舞台を中心にプログラムする中で、創造的実験演劇も見せるシステムを考案。観客の目を開かせる試みがなされています」

このような演劇づくりは、日本と大きな違いを示すものだった。そして「資金援助がなければ商業主義的に陥り兼ねない弱さを抱えているのが演劇だ」と指摘した。

そのほかにもフランス演劇は20年前からインテリ主義やパリ中心主義に陥ってモラルを語るようなものになっていった経緯にまで話は及んだ。またこれからの方向については、コメディフランセーズが伝統的な演劇を保持しつつ、一方でアマチュア劇団こそフランスのこれからの演劇を変えていく存在だという。プロの劇団を立ち上げたフェブリエ氏は、「アマチュア劇団の方が独創的な仕事ができたと、劇団の資金繰りに奔走する日々を紹介。また演劇の若者離れは、両国共通の悩み。演劇の素晴らしさは、俳優の流れる汗を直接見ることでできる所にあるとアレール氏はいう。それを子供たちに教えるのは両親だと強調。

意見交換の最後には、「ビジネスライクになった現代でも、より人間的なリズムを求める時代が必ず来ることを信じています」と熱く結んだ。

フランス大統領選挙

極右候補

ルペン「勝利」が

投げかけたもの

4月21日に行なわれたフランス大統領選第一回投票の結果、極右候補のルペン氏が躍進したニュースは、世界中を駆けめぐった。新聞雑誌は、こぞって「政治的大地震」「深刻な敗北」などを見出しを飾った。それを受けた

5月5日の第二回決選投票では、今までどおり現職のシラク氏が再選されたが、その結果を踏まえ《フランスは変貌するか》と題したシンポジウムが開催。会場の日仏会館ホールは、熱気に包まれた議論が交わされた。

今回のフランス大統領選挙は、最終的には現職大統領が再選したもの、その経緯では今までにない結果を生み、EU(欧州連合)問題との関連も含めて大きな議論を巻き起こした。

当財団助成によるシンポジウム《フランスは変貌するか》日仏政治学会企画主催・日仏会館共催は、副題を「フランス大統領選挙とその後」とし、六月に行なわれる総選挙を展望してさかんな意見交換がなされた。

会場にはいつもと違って学生顔もチラホラ見え、人々の関心の高さを伺わせた。シンポジウムは、フランス政治研究所(CEVIPOF)の研究ディレクターであるエティエンヌ・シュヴァイツグート氏の興味深い意見から幕開けした。「極右のルペン氏が社会党で現職の首相であるジョスパン氏を退けて二回目の決選投票にまで進出したことは、フランス人にとって晴天の霹靂です」

シュヴァイツグート氏は、今回の極右の「勝利」は決してフランス世界の現実を反映したものではないという。それよりもむしろ81年を境にミッテラン大統領が社会党政権を獲得して、新しい時代を迎えたこれまでの社会変動の反映が結果として現れたと説明。フランス人が潜在的に持っているイデオロギーの対立の構造をまず示した。

「81年以前のフランスでは、国民全体が政治的にも宗教的にも大きく右と左に分かれ、互いに相容れない深刻な対立をはらんでいました。特に企業の利潤は悪であり、企業を資本家から労働者の手へ取り返されなければならぬ」と主張した共産社会主義は無神論と結びついて、資本主義と真つ向から対立。これは善悪の闘いというほどの位置づけでした」

81年、長年の保守政権を覆してミッテランが社会党政権を樹立。ところが、人々の予想に反して、その後現実の社会変化に適応していくための手段として市場経済の原理は免れないと認め、社会党は実質的な資本主義の政策をとっていったのだ。



そしてフランスは、ミッテランのとったその経済政策によって瞬く間に経済成長を遂げ、人々の生活の質は急速に向上した。労働者たちが感じていたフラストレーションも一気に成りをひそめ、温和な立場を取る政党への支持も急速に高まっていったのだ。それが20世紀後半のフランス社会における大きな変化だという。

政治のマンネリズムを生んだ理由

ミッテラン以降約二十年という年月の間にとられた経済優先主義は次第に保革中道化の傾向を示していった。その結果、各党派でのイデオロギーの溝が薄まり、どの政党も大して代わり映えはしないと考える選挙民が増え、国民の政治に対する失望感を増大させ、政治のマンネリズムを生んでいったのだ。国民の政治離れは、第一回投票の棄権率28%という高さからも伺える。

「この選挙でルペンが進出したのは、必ずしもルペン票が増えたのではなく、棄権率の高さによる結果です。フランスがヨーロッパの中でいかなる役割を果たすかなど、将来に対する戦略や政策論争もなまに終わって選挙でしかないのです」

長部重康法政大学教授に続き、シュヴァイツグート氏もこれには言及。「政治家たちは自分の政治信念よりも票をいかに獲得するかに腐心



新しい対立軸 エリートvs民衆

「外国人イコール危険である」と、現在の政治に対する有権者の批判を巻き起こした結果が、今回の棄権票に結びついたというのである。

棄権率の高さ、社会党の選挙戦略の失敗など今回の大統領選挙の特徴は、司会の渡辺啓貴東京外国語大学教授はじめ、シュヴァイツグート氏、長部氏も詳細に指摘していった。特に数々の不祥事に見舞われながらも、ダイナミズム溢れ、暖かみで親しみやすい人間性を演出したシラク陣営の戦略は誰もが認めるところとなった。

しかしむしろ現在のフランスの抱えている問題の本質は、ルペンの躍進を考えることで自ずと浮かび上がってきたのだ。

たとえば犯罪の温床となっていることに起因する外国人排斥問題を、ルペンは治安に対する不安として主張したが、それはグローバル化を含めたヨーロッパ統合に対する一つの批判なのではないか。「従来のイデオロギーの対立に代わるものとして、フランスでは一体今何が対立軸となっているのか」中村雅治上智大学教授の投げ掛けるこの素朴な疑問が、核心に迫るきっかけとなった。シュヴァイツグート氏は、この疑問に端を發し、ルペン票獲得の要因の背景にまで話は及んだ。

「外国人イコール危険である」という考えがある一方で、出自に関係なくすべての人間は同じ価値を持つというヒューマニズム的な考え方があり、今やフランスでは、大きな対立軸となつていきます。それは教育レベルの高低でヒューマニズムvs反ヒューマニズムとなり、教育水準が低ければ外国人排斥を標榜し、閉鎖的ナショナリズムに走る傾向となつて現われています。反外国人を主張する人は反欧州、反グローバル化を同時に掲げ、それはまた下層階級の人々に限るとまで言えるのです。これら下層階級の人々はルペンの極右に票を投じていることも今や明白です」

つまり現在フランスには今までは違う新しい対立軸が生まれたのだ。それは80%と20%という比率で、中層を含めた上層階級と下層階級に分かれ、エリートと民衆という軸を生み出した。

政党支持も、穏健右派、穏健左派両派あわせて60%以上の得票率に達しているが、一方でエリート支配に対する抗議姿勢として極右極左を支持する人々の比率が前回95年の大統領選と比べ数%から十数%までに増えている。ルペンが決戦投票で550万票を獲得したことでも、その存在は誰の目にも明らかとなった。彼らはイデオロギー的理由を明白にして、欧州統合についてもコアピタシオン(保革共存)についても反対の意志を表明し、それぞれ関連させて対立軸を生み始めているのだ。ルペン現象は、結局はEUが反民

主義的性格を持つ存在になりにかれないと示唆しているのではないだろうか。EUが加盟国の国々一人一人の市民生活の利害と合わないとするれば、その存在意義はどこにあるのか。これは単にフランスだけの問題ではないはずだ」と中村氏。

この選挙結果は、このまま欧州が経済自由主義を押し進めて競争に強い社会をめざすのか、それとも弱者を配慮する方向を重視していくのかという問いを提示したのかも示れない。

総選挙は 保守勝利を予測

六月には総選挙が行なわれて国民議会議員が選出されるが、その結果、過去に何度かあった保革共存となるのか、それとも自派の首相のもと大統領主導の強いリーダーシップを示す本来の第五共和制の機能に戻るのか、大きな焦点となる。

シラクは大統領に選出されたが、現在の国民議会では左派が多数を占めており、自派の保守票をどこまで伸ばせるかを国民に問う選挙となったのである。

シュヴァイツグート氏も長部氏も総選挙の展望は、保守の勝利を予測。その理由は、いざずれも社会党の脆弱さにあると



フランス国民議会

いう。またシラクが今回首相に任命したラファランは、対話重視、市場改革派であるために評判も上々。保守の勝利予測に一役を担っている、これまた両氏の意見の一致を見た総選挙の展望となったのである。

そのあと、シンポジウムは、反ユダヤ人主義、若者の投票行動など、予定していた時間をはるかに越えてさかん意見交換が行なわれた。

しかしながら限られた時間枠の中でのことである。今回のような人々の関心の高いテーマのときには、ことに時間が矢のように過ぎていく。せっかくだが日仏両国の専門家を呼んで意見交換の好機である。思い切つてテーマを絞り込むなど主催者側の今後の工夫に期待したい。

A propos de nos projets...

最近の事業から

フランス囲碁ユース大会 若き棋士たちの出会い

大統領選挙とも重なった5月4日と5日、パリ15区にある会場を借りて、「フランス囲碁ユース大会」主催・フランス囲碁連盟IIが行われた。

小・中・高校生の3部に分かれ、地方予選を勝ち抜いてきた子供たち25名が参加。初日はカテゴリーごとに総当り戦を行い、上位のものが2日目の最終決勝フوندへと駒を進める。それぞれの優勝者は、日本棋院と日本囲碁普及振興会の招きで今夏の日本研修に参加できる。初めての試みだけに、子供たちのやる気をさらに引き出すこととなった。

引率の親たちが見守る中、楽しさ一杯の小学生たちが早さを競っているかのようにはんぱんと石を置いていく。落ち着きがなく少し騒がしいのだが、その横で少しも動ぜず、中高生たちは慎重に打っている。中には電子手帳に記録している子供もあった。日本旅行を勝ち取った子供たちは7月31日から約2週間滞在することとなる。



フランスは囲碁でも欧州をリードする国の一つで、この東洋のゲームを楽しむ人たちは全国で5000人以上いる。十数年にわたってフランスでの囲碁普及に情熱を傾けてきた小林千寿五段によると、碁も音楽や語学のように、子供の頃から親しみ始めることが上達への最良の方法だと理解され、子供たちへ教えることに熱心な人が増えてきているという。そこでフランス囲碁連盟は2000年から子供の囲碁普及に本格的に取り組む始め、学校でクラブをつくるなどの活動を行っている。その努力が実り、今では160名以上の子供たちが連盟に登録するようになった。碁の本場である日本や中国、韓国と比べると、大幅増である。96年時には70名程度だったことを考えると、

漫画とテレビアニメの「ヒカルの碁」ブームをきっかけとして、碁を習い始める日本の子供たちも激増している。フランスの子供たちを迎えるこの夏、若き棋士たちの出会いが楽しみだ。

A la carte

ア・ラ・カルト

フランスの女形が語る

『テアトル・デュ・タン』の演劇



能、狂言、日本舞踊、モダンダンスを習得し、1963年の渡仏以来、独自の創作活動を続けてきた一人の日本人がいる。伏屋順仁氏である。1983年パリ11区に劇場「テアトル・デュ・タン」を開き、日本の古典芸能と西洋演劇の媒酌人たらんとして、常に実験的な試みを行っている。

同氏が十数年かけて育て、フランス人女形としても活躍している舞台俳優オリビエ・ブライトマン氏が、5月16日当財団パリ本部において講演会を行い、師の演劇理論について語った。

それは現実をリアルに再現するのではなく、様式化することで人間の本質を表現するギリシア演劇から多いにインスピレーションを受けているという。「例えば、泣くという行為を舞台で表現するとき、本物の涙を流せば泣いていることは分かりませんが、よけいな飾りに過ぎず、泣くことの本質を見せることにはなりません」。人間の深い感情の琴線に触れるためには、抽象化、様式化という作業が必要となる。

それには肉体の重心移動が重要であると説明。コップの水を飲む例を取り、最初に体の重心から発せられた動きが、次第に腕から手、指へと

伝わって最終的にコップを手に取り水を飲む。行為から意味をはずり取りこの一連の動作に集中し、非常にゆっくりと静かに行うことによって、空間と時間の流れが感知される。

女形とは女性らしさの本質を探していく作業にほかならならず、それは女優にとつても有意義だ。そして伏屋作品以外で女役を演じるときにも役立つという。しかし、日本の所作をそのまま模倣するのは西洋の観客の目には単に変わった演技としか映らない。ではどうするか。

「結局は観客が日本のテクニクを意識することなく、僕の演技として観てもらいようになるのが理想なのです」。これは演劇における西洋と東洋の結婚という偉大なチャレンジなのである。



Petite note

編集後記

第5回パリ・シャトレ劇場滞在研修オーディションが10月末に行われます。ご希望の方は住所、氏名、電話番号を明記の上、下記まで要項をご請求ください。

応募期限は9月10日消印有効です。

(M)

笹川日仏財団ニュースレター La Lettre

2002年7月発行 Vol. 6 No. 2
 発行人：富永 重厚
 編集人：関 晃典
 発行：笹川日仏財団
 〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2
 TEL：03 (6229) 5448
 FAX：03 (6229) 5449
 E-mail：matsugam@spf.or.jp
 http://www.spf.org/ffjs/

プロジェクト・カレンダー 2002年7月～9月

- 7月4日(木)～7日(日)
《ジャン・ジュネ作「屏風」公演》
※本操り人形劇団
結城座とのコラボレーション
フランス現代演劇の一年／於東京
- 7月31日(水)～8月13日(火)
《日仏青少年囲碁交流》
若きフランス棋士たちの日本研修
日本棋院・日本囲碁普及振興会
於東京ほか
- 9月14日(土)、15日(日)
《日仏教育学会・創設20周年記念シンポジウム》
高校教育をテーマとする日仏の討議
日仏教育学会／於東京
- 9月15日(日)～11月20日(水)
《白川昌生展》
現代美術と白鷺や地域文化との関係を探る
白川昌生／於メス
- 《ユゴー生誕二百周年 記念フェスティバル》
9月開催(予定)
■ユゴーを巡る講演会
9月上演(予定)
■ユゴー作「逸楽の王」演劇公演
9月25日(水)、26日(木)
■「逸楽の王」原作・オペラ「リゴレット」公演
日仏音楽友の会／於東京